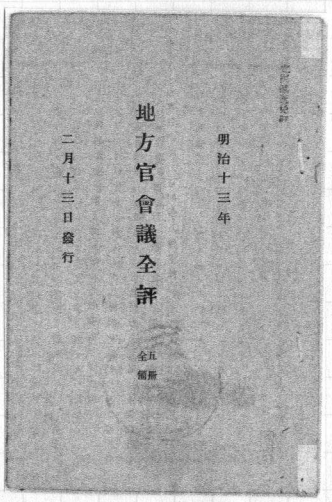


中島勝義 ちかしま かつよし 政論家、狂詩作家。安政五年五月五日蝦夷（石狩國  
星部）生れ、昭和七年七月十五日歿（八六―一九三）。字子彬。號中洲、  
中洲居士、中洲道人、市川玩球、狩水漁長、玩球少年、玩球市仙、玩  
球狂仙、花月庵玩球等。父彦左衛門勝彦は幕府の甲州御留守居與力、  
安政三年蝦夷地開拓の事に與<sup>あづか</sup>り一家を擧げて移住。勝義は次子、初名  
岩澤義三郎、のち中島姓に復す。

明治初年上京、開成學校、中村敬宇の同人社に學び、堀秀成に國文を、  
鹽谷氏に就き漢學を修めた。時小松原英太郎主宰誌『評論新聞』で  
自由民權論を執筆、小松原入獄後主筆となる、九年自らも筆禍に遭  
ひ、禁錮二カ月の刑で佃島入りし、當時獄中に在つた成島柳北、末廣  
鐵腸、杉田定一等と相識る。出獄後は『東京曙新聞』、『廣島新聞』  
（主筆）（二年間）、『政論』、『福陵新報』（主筆）等を轉々、この間  
『俗夢驚談』（明治九年十一月吉岡平助出版）、『地方官會議全評』  
全五冊（明治十二年）一月―三月共同社）を著作刊行。また『國會之組  
成』（明治十二年刊）を著すも發禁、併せて禁錮六カ月の刑に處せ  
られ再度下獄。その後は賛育社を興し、『教育雜誌』、『學藝雜誌』  
等も發刊。二十年には臺灣鐵道會社の創立委員囑託を受け渡臺すると、  
官設となりたため翌年歸京。後年は書畫刀劍鑑定を業とした。

柳北在世の折、『朝野新聞』に狂詩を  
掲げたのを手始めに、柳北、石井南橋  
兩大家歿後は、市川玩球等の名で狂詩  
壇に活躍、飲仙會を組織し、八潮糕盆  
と共に其半耳を執つて居た。……明治



年間における狂詩中興の功（野崎左文）があつた。